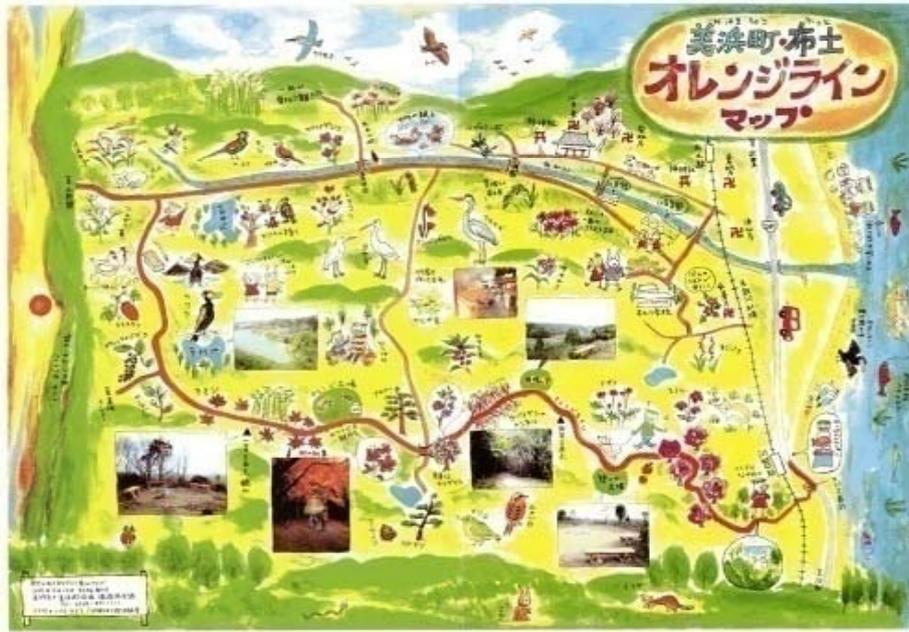


## 里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

|               |   |
|---------------|---|
| 分類            | (地域レベルでの取組基盤の整備)協働と持続性確保のための枠組み・体制の整備   |
| 手法名           | 地元学的手法による地域資源調査とまちづくりの取組の始動   |
| 主体            | 布土まちづくり推進委員会  |
| 背景<br>(地域の課題) | 布土地域には里山や農地が多く、海も近い土地柄だが、あまり使わなくなった里山では竹林がどんどん広がっていく状況にあり、かつての道が使われず放置されたままになっていたため、自然と共生したまちづくりの推進をめざしていた。   |
| 手法/方策の詳細      | 平成6年「自然と共生のまちづくり」を目的に、「布土まちづくり推進委員会」を設置。生ごみ減量化、台所排水の浄化、家庭・地域を花いっぱいにする活動などを始め、平成16年には「里山クラブ」を部会として立ち上げた。まず地元学による地域の生物、環境、生活、地域にとっての宝もの探しを実施。そこで確認した地域の資源を、住民同士の話し合いにより、かつての道(愛知用水工事道を鉄道会社が購入したハイキングコース予定地)を活用し、「オレンジラインマップ」を作成。ほとんど使われていなかったこの道を里山クラブとして整備し、同時に里山保全活動を行うことになった。草刈り、間伐、町民によびかけて自然観察をしながらのハイキング、や、桜、山ツツジ、モミジなどを植樹。見晴台やベンチの設置、地元経済団体等のボランティア活動もはじまり、町民や観光客の散策路として活用されるようになった。現在は、竹林整備と経済化のための取り組みも開始。「布土竹林整備協議会」をつくり、近隣大学とも連携して、竹林整備と竹炭の農地元・有機野菜作りに取組始めている。 |
| 手法・技術的視点      | 放置された里山の保全・活用は、地域が主体となっていく必要がある。「何から始めたらよいか分からない」というときは、地域の人たちで皆でまず地域を歩き、地域の現状認識を共有し、何をどう活用していったらよいかを現場に足を運んだ上で話し合う場が必要である。その後は出来ることから、試行的にでも活動を起こしていくことで取組を前身させることが可能になる。  |
|               |   |
| 参考資料          | 里なび研修会in愛知 布土まちづくり推進委員会 杉浦剛   |